

治安情報 2010 年 第 3 四半期報告書

対象地域	フランス リヨン (及びローヌアルプ州)	在リヨン出張駐在官事務所 リヨン日本人会治安情報収集チーム	
		作成日	対象期間
調査方法 新聞 サイト	Le Progrès	2010 年 9 月 30 日	2010 年 7 月～9 月
集計情報の流布	未	在留邦人対象に各団体及び在リヨン出張駐在官事務所ルート	
調査項目：			

報告要旨

- I. フランス：テロの脅威に伴う警備強化に関する注意喚起（2010/09/23 付）
- II. リヨン地方の機動隊に間もなく EC135 ヘリコプター装備
- III. お年寄り防犯対策
- IV. 予防接種：季節性インフルエンザ
- V. サンテティエンヌで新しい耐性菌のケース 2 件確認

1. フランス：テロの脅威に伴う警備強化に関する注意喚起（2010/09/23 付）

1. 報道によると、フランス当局は「信頼できる情報として、重大なテロの危険性を示す深刻な兆候がある。」として、当地における差し迫ったテロの脅威の存在につき言及するとともに、現在、警戒態勢を強化している旨言及しています。

2. 今回のフランスにおけるテロの脅威は、モーリタニアでのアルカイーダ組織（AQIM [イスラム・マグレブ諸国のアルカイーダ]）掃討作戦の結果、同組織がフランスに強く敵対していることなどが背景にあると考えられます。その後、ニジェールにおいてもフランス人等の誘拐事件が発生しています（2010年9月17日付スポット情報「ニジェール：外国人誘拐事件の発生に伴う注意喚起」参照）。

3. ついては、フランスに渡航・滞在される方におかれては、上記の内容に十分留意し、テロ事件や不測の事態に巻き込まれることのないよう、最新の関連情報の入手に努め、百貨店を含む大勢の人の集まる施設や地下鉄駅その他交通機関を利用する際には十分警戒する、周囲の状況に注意を払うなど安全確保に十分注意を払ってください。

4. また、爆弾テロ事件に関しては、以下も御参照ください。

（パンフレットは、<http://www.anzen.mofa.go.jp/pamph/pamph.html> に記載。）

（1） 2010年6月3日付け広域情報「爆弾テロ事件に関する注意喚起」

（2） パンフレット「海外旅行のテロ・誘拐対策」

（3） パンフレット「海外へ進出する日本人・企業のための爆弾テロ対策 Q&A」

（問い合わせ先）

○外務省領事局邦人テロ対策室（テロ・誘拐に関する問い合わせ）

住所：東京都千代田区霞が関 2-2-1 電話：（代表）03-3580-3311（内線）3100

○外務省領事局海外邦人安全課（テロ・誘拐に関する問い合わせを除く）

住所：東京都千代田区霞が関 2-2-1 電話：（代表）03-3580-3311（内線）5140

○外務省領事サービスセンター（海外安全担当）

住所：東京都千代田区霞が関 2-2-1 電話：（代表）03-3580-3311（内線）2902

○外務省 海外安全ホームページ：<http://www.anzen.mofa.go.jp/>
<http://www.anzen.mofa.go.jp/i/>（携帯版）

○在フランス日本国大使館

電話：+33 (0) 1-4888-6200

○在ストラスブール日本国総領事館

電話：+33 (0) 3-8852-8500

○在マルセイユ日本国総領事館

電話：+33 (0) 4-9116-8181

○在リヨン出張駐在官事務所

電話：+33 (0) 4-3747-5500

（以上 2010年9月24日付「リヨン出張駐在官事務所からの安全情報に関するお知らせ」メールより）

II. リヨン地方の機動隊に間もなく EC135 ヘリコプター装備

リヨンを訪れていたブリス・オルトフー内相は昨日、先週金曜日に強盗事件のあったリヨン8区のスーパー「Casino」の近くで、リヨン地方の機動隊にユーロコプター社のEC135ヘリコプターを装備すると発表し、強盗対策は最優先事項であるとした。リヨンではこの数ヶ月間に、スーパーや宝石店などを対象とした10件ほどの強盗事件が発生しており、きわめて凶暴なケースも目立つ。オルトフー内相は、「EC135機で、強盗犯らが乗った逃走中の車をリアルタイムで追跡することはもちろん、サーマルカメラにより車内の運転者をビデオに撮ったり、ナンバープレートを読み取ったりすることができる。また、地上の部隊にとってもリスクが減る。」と述べている。また、同相が発表したその他の対策として、警察・憲兵隊の車両にナンバープレート自動読み取りシステムの導入、犯行の手口や犯人のプロファイルのみをリストアップしたデータファイルの作成などがある。

◆ 強盗事件（2002年以来のローヌ県における推移）

2002年	334件
2007年	135件
2008年	182件
2009年	156件
2010年（前期）	177件

◆ 2009年6月から2010年6月までの統計

	2009年	2010年
確認件数	275件	355件
検挙件数	71件	110件
検挙率	26%	31%

- ◆ フランス全国における強盗事件発生率（2009年8月～2010年8月）：-23%
（ソース：仏内務省）

（以上プログレ紙8月13日付）

III. お年寄り防犯対策

今年7月1日から、「Tranquillité Vacances」（安心して休暇を）のシステムに倣い、警察官がお年寄りを支援し、暴力等から身を守るためのアドバイスを提供している。「一人暮らしで誰も頼る人がいない」と心配していた69歳の老人は、郵便受けに入っていた「Tranquillité Séniors」（お年寄り防犯対策）のパンフレットを見て早速警察署に連絡した。このプログラムの登録者には、週2回警察の担当者から電話がかかる。「お年寄りができるだけ自分に責任を持ち、自分で自分の身を守り、日常生活のあらゆる出来事に

対処できるようアドバイスする」ことが目的だ。

お年寄りには特に、引ったくり、空き巣、偽の水道局職員などの手口による盗難などの被害に遭うケースが多い。

警察では、日常生活でのちょっとしたヒントだけでなく、他人とコミュニケーションし、外出し、知り合いや友人を作って、できるだけ孤立しないことも勧めている。独りでいるほど不安を感じやすいからだ。現在、このプログラムへの登録希望者が増えており、お年寄り夫婦の申し込みもあった。

- ◆ 82歳になる老人女性の証言：「配管工が来る予定だったので用心せず、ドアを開けてしまいました。私の住む住宅で水道工事をしているという配管工が尋ねてきて、流しの下を見たいと言いました。そこへ、警察官と名乗る二人組の男が尋ねてきました。不審に思ってドアを開けないでいると、家の中にいた配管工がドアを開けてしまいました。私は3人に脅され、殴られて指輪を盗まれました」。その事件以来、女性はカメラ付きインターホンを取り付け、来訪者には身分証明を提示してもらっている。

お年寄りに対する犯罪の統計データ（フランス全国、2008年～2009年）

	2008年 (確認件数)	2009年 (確認件数)	(上昇・減少率)
拉致	21	43	+104.8%
巧妙な手口を使った盗難	1217	1162	-4.5%
住居侵入	513	496	-3.3%
押込み強盗	94	96	+1.5%
空き巣	13484	15603	+15.7%

盗難：+2.1%（60歳～69歳）
+1.7%（70歳以上）

（ソース：国家憲兵隊およびINSEE《フランス国立統計経済研究所》）

防犯対策メモ

- ◆ ドアに施錠ロック・セキュリティシステムなどを取り付ける。常に誰かがいるように思わせる。
- ◆ 現金を持ち歩くときは少額にとどめ、なるべく銀行カードで支払う。
- ◆ 近所付き合いを持ち、できるだけ孤立を避ける。

（以上プログレ紙8月19日付）

IV. 予防接種：季節性インフルエンザ

今日から、季節性インフルエンザの予防接種キャンペーンが始まる。

フランスでは、季節性インフルエンザの予防接種開始時期は毎年秋初頭と重なる。ところが、昨年はパンデミック（H1N1）2009のワクチンとこれに関する論議に話題をさらわれた。

流行ピークは過ぎて状況が落ち着いたものの、H1N1/2009 ウィルスは引き続き検出されているため、A 型 (H3N2) ウィルス及び B 型ウィルスとともに、新型インフルエンザのウィルスが 2010-2011 年季節性インフルエンザのワクチン株に含まれている。毎年季節性インフルエンザの予防接種を受ける人は今年も例年通り受けると予想されるが、難しいのは、昨年新型インフルエンザの予防接種を受けた人だ。ただし、今年の普通ワクチンには、H1N1 ワクチンで多くの論議を巻き起こしたアジュバント（免疫補助剤）が併用されていない。

いずれにしても、リスクが高い人のインフルエンザ予防接種率は一般的に不十分で、今年目標値は 75% に設定された。

季節性インフルエンザ予防接種は通常、65 歳以上の人、及びぜんそく、心不全等を含む慢性気管支肺疾患などを持つリスクの高い人の場合に推奨され、無料で注射を受けられる。

(以上プログレ紙 9 月 23 日付)

V. サンティエヌで新しい耐性菌のケース 2 件確認

耐性菌に感染したインドからの帰国者一名とマダガスカル諸国からの帰国者一名の入院を受けて、衛生対策が強化された。

8 月中旬頃から、NDM1 と呼ばれる細菌に感染した患者が一人フランスで治療を受けているが、今回は 2 ケース目。今回の患者はインドで緊急手術を受けた後フランスに帰国し、サンティエヌの大学病院センターで治療を受けている。また、やはり抗生物質が効かない耐性菌に感染している別の患者も入院した。

新種細菌について知っておくべきこと

- ◆ インドが発生源

New Delhi metallo-beta-lactamase-1 「ニューデリー・メタロ β ラクタマーゼ 1」: NDM1 という酵素遺伝子を持ったこの細菌が世界で初めて確認されたのは 2009 年。インドの病院に入院したスウェーデン人患者だった。

- ◆ 接触による感染

空気感染はない。腸内細菌で、手や物に触れて感染する。手を洗うことが感染を防ぐ最良の方法。

- ◆ リスク

この種の細菌により、膀胱炎、呼吸器感染症、消化器系感染症が起こることが多い。

- ◆ 対策

Tigecycline (チゲサイクリン) と Colistine (コリスチン) を除いてほとんどの抗生物質が効かない。

(以上プログレ紙 8 月 27 日)